

海外新話卷之四

賈人張鴻製虎尾陣圖事

浙省の所屬密雲縣の賈人小名へ張鴻とつる者あり
年四十余此者已ヶ店上小古器古物を置てこれ販賣に以
て産業とす生來文字が字び又武藝が習む然る小
不思錢ある哉去年以來英吉利國の夷人海邊の諸城は
攻入毎度合戦ありて味方敗北を固きこれ所深く憂
ひ何やうん數日門戸がもかむ獨り端坐してありけるが
竟小英吉利人小敵對し極て勝利あるの陣法が考へか
せり依て自らこれ紙上小圖寫し他人小示さんとまれども

元來無器用の性質あれば胸中の支度も筆小字を紙
に依て同村の畫工那老に招き來り己が胸中にある
所を告陣圖に寫し又書生趙德に托し思ふ如くのべ
文を作らしめたる小郎其國解あり徳に此陣名を何と定
めしむると同小虎尾陣と名くべし由を承へられ徳に即ち虎
尾陣圖の四字を上と題し張鵬に陣圖の就に喜び趙德に
那老との兩人小向て厚其勞を附せ右の友人も此陣法を以
て甚奇なりと一若小歎賞して去ぬ後數日ありて張鵬自
ら軍營小参り右の國公總督裕輝に獻呈せんと公は
總督これ陣圖で大に奇なりと一要員に命じ直に張鵬と

已おのれ前まへ又また召よか—ぬ張ちやう鶴かくの右みぎの陣じん圖ずを捧ほう呈てい—一いつ云いふも發はつ
せぞ退たい去きよせり就つて総そう督とく其その圖ずを披ひき其その解かいを讀よる不いか如う何な
小せう由ゆ英えい人にんと對たい戰せんまふきの陣じん法はふゆて馬ば隊たいを設りけ火か器きを多おほ
く其その法はふ黃わう帝ていの握あく機き孔こう明めいの八はつ陣じん又また合あ—戰せん閉へい小せう臨りんで運えん用よう
の駿せん速そく猛もう烈れつあると一いつ度ど虎この尾びを履ふそたへ回くわい顧こ—て直ちやう小せう人にんと
唾たふと云いふへ機き勢せいを合あはれべ虎こ尾びの陣じんと云いふ名なづけ—ある孫そん
武ぶ子しの云いふ勢せい篇ぺん小せう於おて其その勢せい險けん其その節せつ短たん—とあつて別べつは陣じん
法はふの統とうされた勢せいの險けん小せう節せつの短たんまふ全ぜんく陣じん法はふの極ごく意いある
と張ちやう本ほん学がくの語ごさるも此こ虎こ尾び陣じん圖ずをひて益えき發はつ明めいせうとて
總そう督とくの深ふかく感かん賞しょう—てあむ叔しやく其その陣じん形けい圓えん圖ず三さん層そうあり内うち

層の圓徑二百間、周九百間とす。歩卒二万七千人を備へ、大小の鉄砲を難拔中層の徑六百間、周八万間、外は向く八百間、内は向く八百間、毎小時馬一千匹合て八千匹と備へ、外層の圓徑九百間、周二千七百間、歩兵八千二百人、是又大小の鉄砲を難拔外層の外列は之處の備あり、毎隊二百間、家ふ二百人の精兵を撥用ひ、種々の大器を難拔く、毎隊の大器稍大なるものを首に置、其車はは付、運轉は便あり、又其外は溝を堀、土居を匝ら、數處は門を開く、元來此陣法は之の數を以て圓周とす、四の數より、重層とす、陰陽の兩數とす、布列の間は胎、青正の妙変と、隊伍の中は、分、敵と相戦ふ

虎尾陣圖

塹壕

